

2014年6月1日 聖餐礼拝

説教 神さまの約束

創世記3章14-24節

【喪失を覆う希望】

人は希望がなくては生きていくことができません。しばしば、途方にくれる私たちにはどのような希望があるのでしょうか。創世記3章で罪を犯した男と女にはどのような希望があったのでしょうか。

【原福音＝福音の原型（プロトタイプ）】

「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく」（15）は原福音と呼ばれるところ。福音の原型です。人を罪に引きずり込んだ「へび」との間に神さまが、決着をつけてくださる。女から生まれる者を通して。彼も大きな犠牲を払うことになるが、へび、すなわちサタンは息の根を止められる。まさに十字架です。神さまが、主イエスによる救いを宣言してくださっているのです。

【失樂園】

「失樂園」いう有名な文学作品があります。17世紀のイギリス、ジョン・ミルトン作。その中で、神さまの宣告の後の場面がとりわけ印象深い。女は絶望する。けれども男は女に、15節のみことばを思い出せ、と言います。そこに希望を発見したのです。自分たちの敵で

あり、子孫たちの敵を滅ぼす希望は、この神さまの言葉にある。この神さまの言葉にしか、希望がない、それがわかったのです。私たちの希望は主イエス。主イエスが私たちの絶望のただひとつの解決なのです。

「主…は、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してください」った（ヘブル2:14-15）、とあります。父なる神さまがくださった原福音は、十字架の上で福音となりました。父なる神さまと同じように、主イエスも私たちをあわれんでくださいました。主も悪魔を憎んでくださいました。悪魔は私たちを苦しめ、滅ぼそうとします。けれども神さまは私たちを滅ぼそうとするものを決しておゆるしにならない。私たちは神さまにとってたいせつな存在だからなのです。

【聖なるお方に】

礼拝とは何でしょうか。それは、「聖なるお方に会うこと」。礼拝説教とは何でしょうか。「聖なるお方に会うことの助け」です。もちろん礼拝説教の中では、聖書の解説もおこなわれます。場合によっては、教理の教育もあるでしょう。けれども、なくてはならないものが、ひとつあって、それは、聖なるお方に会い、触れていただくこと。これは、神さまがしてくださることです。そのた

めに牧師たちは、聖霊の導きを祈り、説教を吟味して、神さまがお出会いくださるのに、じゃまになるものをとりのぞこうとします。

けれども、神さまにお出会いするために説教者の果たす役割は半分だけです。聞く人の側にも祈りが必要です。祈って説教者を覆うようにして、補うようにして、聴き取るのです。神さまのことばを取り次ぐ説教者ですが、あまりにも不完全です。けれども、やはり神さまに立てられているのです。神さまが、説教者に聖霊を注ぎ、聞く会衆にも聖霊を注いで下さっているのですから、そこに必ず聖なる神さまとの出会いが起こるのです。

そして、聖なるお方にお出会いするときに、私たちの心は満たされます。心の痛みには癒しが始まり、罪に対しては悔い改めが始まります。そして、絶望のあるところには、希望が生まれるのです。

【聖餐】

もういのちの木の実に近づくことは出来なくなった私たち。けれども「わたしがいのち」とおっしゃる主イエスをご自分から私たちのところに来て下さいました。私たちは、礼拝でも、聖餐でも、そのいのちを受け取るように招かれているのです。神さまが聖なるご自分にふれさせたいと願ってくださる聖餐。そこに神さまの「ひとふれ」が起こらないわけがないのです。